

啄木のふるさと『もりおかの短歌』

第十回年間最優秀賞決定!

年間最優秀賞(二首)

やはらかに

夏の名残りの雨がふる

鬼が手形を押ししたる石に

青森県八戸市 木立 徹

【受賞者からのコメント】

岩手県名の伝説である三ツ石神社の昔むきた石。かつて訪れた時は、思ったより大きな石だと感じました。その昔、鬼が悪さをしない約束として手形を押しと言われたその石に、夏の名残りの雨が降っていました。昨年の年間優秀賞に続く受賞を感謝申し上げます。

【審査員講評】

(八重嶋) 盛岡市の三ツ石神社にある鬼の手形。悪さをした羅刹という鬼が三ツ石の神にとらえられ、岩に手形を押しして許しを請うたという。岩手の名の起源とも。その岩にやはらかに、夏の終わりの雨が癒しの如く降る。情緒的で感じのよい歌です。

(山本玲子) さんざ踊りが終わると唇の上では「立秋」。季節の変わり目に現われた入道雲がポトポトと温かい雨となって降り注ぐ。景色をまだらにしてやがて雨の色に包み込む。鬼の手形もまたひとつ歴史を刻んでゆくのだ。

(松田) 岩手県の名に由来する三ツ石神社の大きな石。歴は既に秋なのだが降る雨は残暑の熱を帯びて生暖かい。それを「夏の名残りの雨」とさりげなく表現した。上の句と下の句の倒置の手法にも工夫があり余韻を醸す。

(山本豊) 境内にある大きな石には、鬼の手形が押ししてあると言われている三ツ石神社の情景が情感ゆたかに詠われています。「やはらかに」夏の名残りの雨がふる」という表現には、作者の感受性の繊細さを感じられます。

年間優秀賞(二首)

与の字橋 鮭は来たかと思下ろせば

隣にひとり

またもうひとり

盛岡市 小地沢 和志

【受賞者からのコメント】

発想当初は上の橋をイメージしていたのですが、与の字橋ですっかりイメージ通りの光景に思い、与の字橋の歌としました。生活の橋、日常の橋である与の字橋をよんだことで、意図せずして盛岡らしさが出せたのかもと感じています。

【審査員講評】

(八重嶋) 毎年秋深むころ、鮭が太平洋から二百キロも北上川を遡上し、盛岡市の中心を流れる中津川で産卵、命果てます。与の字橋は最も見よいところで、一人また一人と

若き日に妻とあるいた

城あとは

緑の日ざしいまも変わらず

岩手県花巻市 藤原 道正

【受賞者からのコメント】

手をつないで歩いた不來方城、45年の歳月が瞬く間に経過。緑色の大きく茂った思いでの広葉樹の道、古希を迎えた二人。心の奥に潜む銀幕に楽しかった幾多の出来事が写し込まれたひと時であった。

【審査員講評】

(八重嶋) 不來方城址の岩手公園、若い日に妻と連れ立って散歩したのでしよう。あるいはデートコースだったのではないでしょう。あのか。あのころと緑の日差しが変わらないと感懐に耽っている様子がとてもよく伝わってきます。

啄木のふるさと『もりおかの短歌』事業は、啄木が生れ育った盛岡を訪れる観光客や市民による啄木短歌の特徴である「三行書き」の短歌づくりを通じて「短歌のまち もりおか」を推進することを目的に平成二十年より実施している事業です。四つの期間(夏の部・秋の部・冬の部・春の部)に分けて募集し、一年間に応募のあった六七八首(一般部門)の中から第十回目となる年間優秀賞作品が決定いたしました。また、ジュニア部門において、秋の部では「盛岡市立月が丘小学校」、「盛岡市立飯岡中学校」より多くのご投稿をいただきました。誌面を通じてお礼申し上げます。

年間奨励賞(二首)

雪吊りの

繩にいのちを託しきり

石割桜静かに眠る

青森県青森市 鈴木 操

【受賞者からのコメント】

結婚を機に五十年間お世話になった盛岡殊に石割桜の美しさ逞しさに、四季折々励まされ続けました。晩秋後は造園業の方々の温かい心と確かな腕に守られながら、ひたすら春を待つ石割桜が、今も愛しくなりません。

【審査員講評】

(八重嶋) 盛岡地方裁判所構内の石割桜は天然記念物。石割桜の傍に、長い杭を立て、縄で枝々を吊り、積雪に耐えるよう保護する雪吊り。これも盛岡の初冬の風物詩。

枝垂れ咲く

花よりもなお香りたう

君つれあゆむ米内の水辺

盛岡市 赤坂 昌信

【受賞者からのコメント】

平成二十六年秋の部に初投稿して初の優秀賞を頂いてより足掛け5年。応募ごとに優秀賞に選考されましたが年間賞とは縁がないと諦めていました。この度の年間奨励賞を頂いた事は名誉な事と感謝しております。更なる精進を重ねて行きたいと思っております。

【審査員講評】

(八重嶋) 米内浄水場の枝垂桜は、薄くれない花を垂れ、輝くばかりで、本当に見事です。しかしその花よりもなお香り立つ、

繩に命を託して石割桜が静かに眠ると感じるところがよいですね。

(山本玲子) 季節は巡る。北国の厳しい冬がこの当たり前の自然の摂理さえ感わせずら春を待ちわびる心がある。その繰り返しが石割桜を、盛岡の人々の心を謙虚にそして強くしてくれるだろう。

(松田) 盛岡地方裁判所構内の石割桜は樹齢350年を遙かに超える国の天然記念物。見るからに老木の風格を湛える。冬の季節は「雪吊りにさながら命を委ねつつ」というか「頼りつつ」眠っているようにも感じられる。

(山本豊) 花の咲いている石割桜には多くの人が注目するであろうが、雪吊りのある石割桜に注目する人は少ない。「雪吊りの」繩にいのちを託しきり」という表現には、多くの雪吊りの繩のお蔭によって冬を越す石割桜の樹齢さえも感じさせられます。

まばゆい女性を伴にして歩むのですから、作者の有頂天な気持ちがいやらしいばかり伝わってきます。

(山本玲子) 枝垂桜の間を恋人同士の人がお辞儀をするのがよく滑る。ライスシャワーか花のトンネルか。桜の香りは淡く儂い。桜の花の匂いと共に映る風景。君と過ぎた確かな季節がそこにあった。

(山本豊) とてもロマンチックで、女性と一緒に米内の枝垂桜の下を歩いてみたくなるような歌です。「枝垂れ咲く/花よりもなお香りたう」ということは、直接相手に言ったら一笑に付されるかもしれないが、短歌だからいえることです。